

『物類称呼』の見出し語（上）

― 地域性と歴史性 ―

山 県 浩

目 次

1. はじめに
2. 調査対象・方法
3. 歴史性
4. 地域性
41. 東西分布類
42. 西日本分布類（以下、次号）
43. 東日本分布類
44. 無分布類
5. おわりに

1. はじめに

〔1〕本稿は、前稿（山県二〇〇三）を受けて越谷吾山『物類称呼』（一七七五年刊）の見出し語（項目冒頭の漢語の次に示された仮名書きの言い方、用例①の「ゑんどう」など）がくつろいだ場面の言い方としてどの地域で使われるかを考察するものである。

前稿は、《出来るだけ多くの見出し語を同一基準で扱い、その地域性の大凡の性格を把握する》という方針のもと、36項目の見出し語について国立国語研究所編『日本語地図』（以下、LAと略記）に基づき、その地域性を検討するものであった。しかし、後述の如き課題が残されていた。本稿で前稿の欠を補い、LAに基づく地域性の検討に区切りを付ける。

① 豌豆 ゑんどう○畿内にて・のらまめと云 東国にて・ゑんどうと云 伊勢にて・ぶんどつと云 上総にて・ゑんづといふ 78頁

なお、『物類称呼』の本文は、東條一九一四に依つたが、適宜九州大
学国語学国文学研究室所蔵本（須原屋本）を参照した。

〔2〕基本的に本稿は『物類称呼』の見出し語を江戸共通語の語彙資料
として利用するため、その性格をいろいろな観点から捉えていこうとす
る研究の一つである。

見出し語の性格として、本稿は前稿・前々稿（山県一九九八）と同じ
くどの地域で使われるかなどの地域性を捉えることを目的とする。即ち、
地域性の検討を通して、見出し語の共通語的性格の一端を明らかにしよ
うという訳である。

そのために前々稿では用例①の「東国にて・ゑんどうと云」などの如
き見出し語の使用地域についての記述、前稿ではLAを資料にして検討を
重ねた。本稿は、前稿で行った分布類型に基づく地域性の検討で不十分
であった点を補うことを目的の一つとする。

なお、「江戸共通語」という用語はまだ一般的でない、その実態は明
らかでなく、種々議論があるなど、本稿が出発点にする箇所不確かな
ところが少なくない。ただ、これらについてはすべて前稿に任せ、本稿
では立ち入らない。

〔3〕前稿では、『物類称呼』の見出し語の地域性を現代方言によつて
検討する第一歩として、LAに基づく分布類型を設定し、それによつて見
出し語36語がどの地域で使われているかを捉えた。

その結果、日本の東西に広く分布し、それぞれの中心地でも使われる
言い方が半数近くを占めることが分かった。即ち、西日本や東日本の各
地に広がる言い方（AB類）が多く、地域的に限定されたり、LAに殆ど見

出せなかつたりする言い方（N類）は皆無に等しい。地域性が見られる
場合は、西日本に広がる言い方（B類）が多く、小地域の分布では東京
に分布する言い方（b型）が多い等々。

以上の如き点から『物類称呼』の見出し語は基本的に《西日本にやや
傾くが、日本の東西に広く分布する言い方を基本とする》とまとめた。
従つて、西日本色の強さという側面も認められるが、総体として《地域
性の弱い「中立性の高い口語」である》と言える。

〔31〕前稿の検討は、あくまでも20世紀後半の資料であるLAに基づいた
地域性、『物類称呼』の成立から約200年経過した姿についてであった。

また基づいた資料はLAでの分布状況を類型化したものであった。多様
な全国分布が「東西分布」「西日本分布」「東日本分布」「無分布」とい
う分布類型のいずれかにうまく納まる訳はなく、分類に際して無理もし
た。

そこで、本稿の第一の目的は、見出し語ごとに分布状況を詳細に検討
し、その地域性を捉えなおすことである。その上で、ある分布に至つた
200年内外の歴史を探りながら、近世後期のくつろいだ場面の言い方とし
てどの地域で使われたか、そこに何らかの共通性が見られないかなどを
考察する。ただ、36語すべてについて全国的な分布状況を詳述すること
は出来ない。そこで、京坂・江戸及びそれらの周辺地域においてどのよ
うに使われていたかを中心に述べることにする。

第二の目的は、右の如き使われ方から見出し語が近世後期の京坂・江
戸でどのような性格の言い方であったか、それはどのような面で共通す
るかなどを考えていく。そして、可能なものについては、該当の言い方

が『物類称呼』の見出し語として選択されたことの妥当性や意味に言及したい。

〔32〕『物類称呼』の見出し語が江戸共通語としての可能性が大きい以上、どのような性格の言い方であるかを考える際には地域性以外に場面性（文体的性）に着目する必要がある。

本稿では、歴史性の面から配慮するが、本格的な検討は今後の課題とする。

本稿は、歴史性と関連させながら地域性を検討する、具体的には、分布地域（京阪や東京での分布、近畿地方や関東地方での分布）や分布領域の広狭に注目して見出し語の地域性を明らかにすることまでとしておく。ある言い方が『物類称呼』の見出し語とされた必然性などを論じるにはまだ調査不足である^{注6}。

〔4〕前稿には対象とした見出し語が『物類称呼』の巻一～四の48項目中LAJと共通する36語・8%に過ぎないなどの問題もあった。

ただ、この点は本稿でも解決できていない。地域性の検討に限っても、今後『日本方言大辞典』など、種々の資料に基づく検討を重ね合わせ、方法の多様化とともに対象とする見出し語を広げてゆかねばならない。

2. 調査対象・方法

〔1〕本稿は、LAJに基づく地域性の検討を中心に『物類称呼』の見出し語36語が18世紀後半においてどの地域で使われていたかを検討していく。

このように分布状況の歴史的な背景を捉える第一段階として、山県一

九九六・九九七に倣い、中近世期を中心とする古辞書類18種を調査した。これによつてまず東西日本の分布類型ごとに歴史性の傾向を捉える（3章）。

次に4種の分布類型に従つて、各見出し語の分布状況について細かなあり様を示す。それに言語地理学的な解釈を加え、『物類称呼』の（地域—方言形）の記述、全国各地で出された方言書類の記述などに3章の歴史性の傾向を考慮して、近世後期の分布状況を考えていく。

ただ、この程度の資料と限られた紙面で近世後期の全国的な分布状況を示すことはできない。『物類称呼』の（地域—方言形）の記述を僅かに補うに止まる。そこで、実際には京坂・江戸という言語的権威を有する地を中心に近畿・関東地方でどのように使われていたかを問題とする。即ち、京坂・江戸で該当の見出し語はどのような地域性・歴史性・場面的性（文体的性）などを有する言い方として使われていたか、また36語すべてまたその大半に共通して見られるのはどのような側面であるかなどを考えていく。その上で、可能であれば、該当の見出し語が『物類称呼』で《各方言形に対立し、それらを代表する言い方》である「見出し語」として選択されたことの妥当性や意味に言及したい（4章）。

〔2〕『物類称呼』の見出し語を現代共通語形との一致・不一致によつて二分すると、両者の地域性の傾向は対照的なものになる（山県二〇〇三 32章参照）。

即ち、現代共通語形と一致するI類の見出し語は東西に広く分布するものが殆どで、それらの中でも京阪・東京という各々の中心地に分布するものが大半を占めていた。一方、現代共通語形と一致しないII類の見

出し語は、西日本に分布するものが多く、更に京阪・東京に分布しないものが大半を占めていた。

ただ、現代共通語形と一致しないⅡ類の見出し語は、今日京阪・東京に分布しないものでも近世後期には京坂・江戸で一般的な言い方であった可能性が高い。また共通語的性格を有することはの変遷を視野に入れている以上、対応する現代共通語形の分布なども検討しなければならぬ。

そこで、3章の歴史性の検討ではⅠ類・Ⅱ類ごとの傾向、4章の地域性の検討ではⅡ類の見出し語に対応する現代共通語形の傾向も捉えている。

3・歴史性

〔1〕ある意味項目における諸変種の全国的な分布状況は、その京坂語での歴史と無関係に論じることはいできない。

現代共通語形については徳川宗賢氏・真田信治氏などによって〈標準語の地理的背景〉として論じられてきた。江戸共通語においてもその方言（くつろいだ場面の言い方）としての基盤（出自）が京坂語・近畿方言であるか、江戸語・関東方言であるかなどは、歴史的に遡って考えておかねばならない。特に東日本に特徴的な見出し語（B類）の場合、歴史的に遡ったとき京坂の文献に用例が見られるかは、『物類称呼』の見出し語を論じるとき重要な問題となる。

同様にある言い方が『物類称呼』の見出し語として選択されたことの

妥当性や意味を考える場合、地域性より場面性（文体性）が決め手になることが多い。^註この場面性（文体性）は地域性と異なった形で歴史性と関連する。

例えば、古くから用例の見られる歴史の深い語の場合、それ故に死語化・廃語化している可能性が高いが、それだけにくつろいだ場面の話し言葉に加え、改まった場面の話し言葉や書き言葉でも、またはそのような上位場面だけで使われることが予想される。このような場面での使用が見出し語として選択される場合、重要な要因となること、言うまでもなからう。

最終的には近世後期江戸語における場面性（文体性）を項目ごとに検討してゆく必要がある。その点で調査資料が京坂に偏るなど、問題は少なくないが、本稿では京坂における歴史の深淺からその一端を伺い、考察を試みる。

〔11〕山県一九九六・九七では『物類称呼』と『大和本草』に共通する161語につき、中近世期を中心とする古辞書類に基づいて歴史性を検討した。

本稿ではこれを踏まえ、見出し語36語について新たな調査を行い、これらの古辞書類18種における用例の現れ方をまとめなおした（別表—I・Ⅱ及び別表の説明参照）。

本稿で扱う36語のうち15語が前掲の161語に含まれ、重複するところがあるが、この調査結果に基づき、歴史性の傾向を捉える。

〔2〕見出し語の用例は、調査した古辞書類殆どすべてに見られるものから全く見られないものまで種々様々である。

そこで、山県一九九六・九七に従い、用例の現れ方を次の特徴①～③に注目して捉えていく。

①中古期の資料と言える『和名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』のいずれかに用例が存在する(①〈和名抄などの用例〉と略記)。

②調査資料すべてに用例が存在しない(②〈用例の非存在〉と略記)。

③幕末・明治期の資料である『和英語林集成』初版・第三版のいずれかだけに用例が存在する(③〈語林集成の用例〉と略記^註)。

基本的に古辞書類は各時代の規範的な言葉の姿を現している。このため、本稿の如く共通語的性格を有することばを問題にする場合には最適な調査資料と言える。また、調査資料のうち『和名抄』は吾山が「凡例」に示し、よく利用したことが知られている(杉本一九八九 236頁以下など)。

本章では、主として特徴①と特徴②③の対立的な現れ方に基づいて分布類型ごとに歴史の深淺など、歴史性の傾向を捉える。これによって『物類称呼』の見出し語における地域性と歴史性の関連のあり方を明らかにする。勿論、古辞書類における用例の現れ方に基づいて歴史性を捉えることには、方法的に問題が存し、注意すべき点は少なくない^註。

「21」『物類称呼』の見出し語36語における歴史性で特徴的な点は、次の如く特徴①〈和名抄などの用例〉が最も顕著で、約5割の17語に見られ、特徴②〈用例の非存在〉や特徴③〈語林集成の用例〉は例外的に見られないことである(詳細は別表—I参照)。

特徴①〈和名抄などの用例〉の見られる見出し語 17語

特徴②〈用例の非存在〉の見られる見出し語 4語

『物類称呼』の見出し語(上) — 地域性と歴史性 — (山県浩)

特徴③〈語林集成の用例〉の見られる見出し語 1語

特徴①～③の見られないもの、即ち、特徴①ほど古くからは見られないが、中近世期の古辞書類に用例の存する見出し語は約4割の13語に達し、特徴②③の合計語数より多い。

「22」『物類称呼』の見出し語36語を現代共通語と一致するもの(I類)と一致しないもの(II類)に分けて検討する(次項、表—1参照)。

I類とII類はほぼ同傾向であるが、強いて相違点を探すと、I類は特徴①〈和名抄などの用例〉が圧倒的に多く、II類はそれに対して特徴②〈用例の非存在〉が相対的に多いと言える。

一方、II類の見出し語に対応する現代共通語形は特徴③〈語林集成の用例〉が多く、過半数を占める。その歴史の浅さに加え、ある地域色が伺える。

「3」東西日本の分布類型に従って歴史性を検討する(次項、表—2参照)。

本章は基本的に分布類型ごとの傾向を捉えることを目的とし、地域性と歴史性の関連などは4章で論じる。個々の言い方に言及することもあがるが、特徴的な傾向を示すものに限る。

「31」AB類は所属語数の多さのため、既述の如き全体的な傾向(特徴①の多さ、特徴②・③の少なさ)が際立った形で認められる。

更にAB類の中で多数を占めるab型の見出し語は特徴①のみで、特徴②・③は見られない。これは分布領域の広さが歴史の深さと無関係でないことを物語っている。

「31」AB類・ab型の15語は三特徴の見られないものでも古辞書類に広く用例が認められる(項目24「たうがらし」・27「じうやく」の見出し語

を除く)。

例外的な(トーガラシ)は『恵空本』と『和英語林集成(初版・三版)』のみ、(ジューヤク)は『日葡辞書』のみであるが、歴史は浅くない。詳しくは後述するが、いずれも上方から江戸へ飛火した言い方で、AB類・ab型であるが、連続的に東西に分布する他の13語と性格を異にする。

表一 見出し語36語・現代共通語形14語の歴史性

見出し語・共通語形	①和名抄などの用例	②用例の非存在	③語林集成の用例
I類・見出し語(22)	11	1	1
II類・見出し語(14)	6	3	0
II類・共通語形(14)	3	0	8

表二 見出し語36語の歴史性

特徴		①和名抄などの用例	②用例の非存在	③語林集成の用例	備考
東西日本分布・京阪東京分布					
A B類 (24)	a b型(15)	9	0	0	
	a型(1)	1	0	0	
	b型(4)	2	0	0	
	n型(4)	1	0	1	
	小計	12	0	1	
A類(7)	a型(1)	1	0	0	
	n型(6)	2	2	0	
	小計	3	2	0	
B類(4)	b型(3)	0	2	0	n型(1); 該当例なし
N類(1)	n型(1)	1	0	0	

「312」AB類・n型にはAB類で唯一特徴③(語林集成の用例)の見られる見出し語(項目36「こめびつ」)が存する。

他に項目30「まつかさ」の見出し語も『和英語林集成(初版・三版)』以外に『日葡辞書』しか見られない。いずれもI類の見出し語であるが、ともに古辞書類に用例が拾いにくい。

一方、II類である項目25「つくくし」の見出し語は特徴①(和名抄などの用例)、項目13「なめくじり」の見出し語も『和玉篇』以降と、多くの古辞書類に見られる。

AB類・n型の4語のうち、現代共通語形と一致するI類の2語が、歴史が浅く、または古辞書類にあまり見られず、現代共通語形と一致しないII類の2語が、歴史が深いという対照的な歴史性を示す。

この項目30「まつかさ」・36「こめびつ」の見出し語の傾向は、II類の見出し語に対応する現代共通語形に見られたものに通ずるところがある(「22」項参照)。勿論、特徴③(語林集成の用例)を有することは必ずしもその言い方が関東・東日本方言に固有な言い方であることを物語らない。しかし、現代共通語のある面を示すことは間違いなからう。

「32」AB類に対し、地域性の存するA類・B類は、相対的に特徴①(和名抄などの用例)が少なく、特徴②(用例の非存在)が見られる。

「321」A類の見出し語は、特徴①(和名抄などの用例)の見られる3語(項目4「まゆ」・6「きびす」・29「たけ」とそれ以外の4語(特徴②(用例の非存在)の見られる項目23「りうきういも」・26「ぼうふら」と項目22「なんばんきび」・35「いかのぼり」)に分けられる。

後者4語は全般に古辞書類に用例が見出しがたい。これは、言葉の間

題ではなく、後述の如く「生植」「器用」故の事物の歴史の問題と言える。

前者に限定してAB類の傾向と重ね合わせると、AB類・A類ともに京坂で一定の歴史の深さを有することになる。従って、東西に広く分布する、または西日本に広がるなど、一定以上の分布領域になると、その違いは歴史性以外の別の要因によると考えられてくる。

〔32〕B類の見出し語には、AB類・A類の見出し語と異なり、特徴①（和名抄などの用例）が見られない上、4語のうち2語に特徴②（用例の非存在）が見られる。

三特徴の見られない項目19「かはづ」・35「すりこぎ」の見出し語は、全般に用例が拾いにくいのが、前者は『和玉篇』、後者は『文明本節用集』から見られ、東日本分布類としたが、京坂でも一定の歴史を持つことが分かる。

なお、特徴②を示す項目5「くろぶし」・31「かゝし」の見出し語の場合、前者は（クルブシ）、後者は（カガシ）という類似形は古辞書類に見られる（別表Ⅰ・Ⅱ参照）。

以上の如く、B類4語は個別に論じるべき問題が多い。その際には東日本分布類とは言え、京坂語と無関係に論じることはできそうにない。

〔33〕N類としてまとまった分布を持たない項目9「うごろもち」の見出し語は、『和名抄』と『和英語林集成（三版）』という調査資料の中で歴史的に対照的な2種だけに見られる。

分布領域の点でAB類と対照的なN類にAB類を特徴付ける特徴①（和名抄などの用例）の見られることは、『物類称呼』の見出し語において例

外的なように見える。しかし、44章で詳しく述べるが、見出し語における一般的な地域性と歴史性の関連のあり方から大きく外れるものではない。

〔4〕特徴①～③の見られる見出し語は23語で、三特徴の見られない見出し語は13語存する。

しかし、それらの大半は中近世期の古辞書類によく用例が認められる。^{注4}これに全般的な特徴①（和名抄などの用例）の多さ、特徴②（用例の非存在）・③（語林集成の用例）の少なさを併せると、『物類称呼』の見出し語は全体的な傾向として近世以前の古辞書からよく用例の見られる、京坂において歴史の深い言い方に占められると言えよう。

〔41〕『物類称呼』の見出し語36語の現代方言での分布状況は、日本の東西に広く分布し、京都・大阪でも東京でも使われる言い方が半数近くを占めることである。

更に、日本の東西に広がることなく、西日本の各地や東日本の各地に広がる言い方が少なく、地域的に限定されたり、LAJに殆ど見出せなかったりする言い方は皆無に等しい。

そのN類とした見出し語も1語であるが、特徴①（和名抄などの用例）が見られる。N類の認定に再考の余地があるため、『物類称呼』の見出し語における地域性と歴史性の関連のあり方として、現代方言では分布領域が広く、京坂での歴史が深いという、語としての安定度の高さが見えてくる。

勿論、これはLAJという現代方言の分布相と限られた古辞書類に基づいたもので、例外も存すること、忘れてはならない。しかし、これは共通

語的性格の背景として重要な一面である。

〔42〕Ⅱ類の見出し語に対応する現代共通語形14語は、特徴①〈和名抄などの用例〉も有するが、特徴③〈語林集成の用例〉が過半数に見られる(表―1参照)。

見出し語36語では1語(項目36)にしか見られなかった特徴③がここでは14語のうち8語に見られることの意味は大きい。^{注6)}

歴史性の傾向は、このように対照的であるが、現代共通語形の分布状況は、特異なものでなかった。即ち、東西日本の分布類型では、A類・N類は見られず、AB類(9語)が最も多く、他はB類(5語)だけであった(山県二〇〇三 42章〔4〕項参照)。

これはⅠ類の見出し語に見られた傾向で、ある面、現代共通語形の地域性の傾向とも言える。このように一定の分布領域の広さを有するが、歴史は深くないというⅡ類の現代共通語形の地域性と歴史性は、前述した見出し語36語におけるそれと異なった関連のあり方を示す。4章で詳述するが、これはⅡ類の現代共通語形が近世後期以降今日まで江戸を中心に分布領域を急速に拡大した結果ゆえの現象である。

〔5〕Ⅱ類の現代共通語形の分布類型ごとに歴史性を見ると、見出し語全体の傾向との相違点が際立ってくる(表―3参照)。

分布類型はAB類とB類だけで、前者は全体的な傾向と同じく特徴①〈和名抄などの用例〉より特徴③〈語林集成の用例〉が顕著で、後者B類でもこの傾向が覆ることはない。

これに対して見出し語のAB類は殆どが特徴①で、B類は特徴②しか見られなかった。

表―3 Ⅱ類・現代共通語形14語の歴史性

特徴 東西日本分布、京阪東京分布		①和名抄などの用例	③語林集成の用例
		A B類(9)	
		a型(2) 0	2
		b型(4) 1	3
		小計 2	6
B類(5)		a b型(1) 0	0
		b型(3) 1	2
		n型(1) 0	0
		小計 1	2

京阪を中心に東西に広がるAB類における特徴③の現れ方で、このように見出し語とⅡ類の現代共通語形が対照的な姿を示すことは、地域性と歴史性の関連のあり方が異なっていることを如実に物語っている。

また現代共通語形14語で三特徴の見られない3語も中近世期の古辞書類に用例が多いとは言えない。^{注7)}

〔51〕項目ごとにⅡ類の見出し語と対応する共通語形につき、分布類型と歴史性の特徴を示すと、次の如くである(三特徴の見られない場合は「φ」と記す)。

- 4 「まゆ」A類n型・①―「まゆげ」AB類ab型・φ
- 5 「くろぶし」B類b型・②―「くるぶし」B類n型・φ

- 6 「きびす」 A類 a型・① — 「かかと」 B類 b類・③
 9 「うごろもち」 N類 n型・① — 「もぐら」 AB類 b型・③
 13 「なめくじり」 AB類 n型・φ — 「なめくじ」 AB類 b型・①
 16 「とかげ」 AB類 a型・① — 「とかげ」 B類 b型・①
 19 「かはづ」 B類 n型・φ — 「かえる」 AB類 ab型・①
 22 「なんばんきび」 A類 n型・φ — 「とうもろこし」 B類 b型・③
 23 「りうきういも」 A類 n型・② — 「さつまいも」 AB類 ab型・③
 25 「つく／＼し」 AB類 n型・① — 「つくし」 AB類 a型・③
 26 「ぼうふら」 A類 n型・② — 「かぼちゃ」 AB類 a型・③
 27 「じうやく」 AB類 ab型・φ — 「どくだみ」 AB類 b型・③
 29 「たけ」 A類 n型・① — 「きのこ」 B類 ab型・φ
 35 「いかのぼり」 A類 n型・φ — 「たこ」 AB類 b型・③
- 「511」 II類14項目における共通語的性格を有することばの変遷を考えると、《見出し語》≡伝統的な古い言い方・現代共通語形≡新しい言い方」という先後関係が想定できる。

この場合、《見出し語》≡特徴①・現代共通語形≡特徴③」という対応を見せる項目が該当することになる。この14項目でこのような対応は項目6・9・25に見られ、逆の対応を示す項目は存しない。

これは、『物類称呼』の見出し語を江戸共通語の資料として捉えていこうとする場合、心強い現象である。

「512」他にいろいろな観点から論じられるが、山県二〇〇三・32章「42」項と同じく分布の東西対立の点から整理する。

例えば、II類の見出し語に最も多いA類の場合（7語）、対応する現

代共通語形はAB類が4語（項目4・23・26・35）、B類が3語（項目6・22・29）で、地域性の傾向の違いがよく現れていた。これらの歴史性は、見出し語に特徴①は3語、特徴②は2語に見られるが、現代共通語形に特徴①は見られず、特徴③は5語（AB類3語・B類2語）も見られる。

現代方言の分布類型で見られたII類の見出し語と対応する現代共通語形の地域性の違いは、右の如く歴史性の傾向でも確認できる。それぞれが基盤とすることばの違いに基づく現象であることは間違いないようである。

4・地域性

「1」山県二〇〇三では『物類称呼』の見出し語36語についてLAJにおける西日本と東日本での分布状況及び京阪と東京での分布状況を類型化し、全体的な地域性のあり方を示した。

ただ、考察の基盤となる見出し語の分布類型は筆者の判断で4種に分類したものであった。即ち、河西一九八一などの如く見出し語の使用地点数を集計するなど、客観的なデータに基づいたものでなかった。またその一部を井上二〇〇一（第II部など）で検証することもしなかった。

本章では、このような前稿の欠を補うため、LAJにおける全国的な分布状況について見出し語ごとに詳細を示す。そして、『日本語地図・解説』、『物類称呼』や方言書類の記述、更に前章の歴史性の傾向に基づいて、近世後期における分布状況を考えていく。

ただ、前述の如き理由からその際には京坂・江戸及びそれらの周辺地域に重点を置いて述べる。そして、これによって近世後期の見出し語の性格がある程度捉えられよう。その上で、該当の言い方が『物類称呼』の見出し語として選択されたことの妥当性や意味について本稿の範囲で言及したい。

〔2〕本章では、4種の東西日本の分布類型に従って述べていく。

具体的には、41章で東西分布類（AB類）、の24語、42章で西日本分布類（A類）の7語、43章で東日本分布類（B類）の4語、44章で無分布類（N類）の1語を京阪・東京の分布類型ごとに述べる。

全国的な分布状況を示す場合、最も広い分布領域を有する言い方に注目する。これは、この分布領域の広さが共通語的性格の一つとなる（地域的な通用性の高さ）の基盤となるためである。勿論、この場合、その分布領域内に京阪・東京を含むことが重要である。これらの地で使われるか否かは見出し語の場面性（文体性）の高さ（Ⅱ文体価値）にかかわってくる。またこの視点は近世後期の状況を考える場合も必要である。

なお、現代方言の分布状況は原則的にLAJによるが、東京・関東地方の分布状況は大橋勝男『関東地方方言事象分布地図3』（以下、DKAと略記）で補うことがある。

〔3〕対象とする見出し語は、AB類を中心に全国分布で最大の領域を有することが多い。

このため、結果的に見出し語を中心に分布状況を概観することになる。しかし、見出し語と拮抗した領域やそれ以上の領域を有する言い方の存在する場合も見られる。また現代共通語形と一致しないⅡ類の見出し語の

場合は、その分布領域の広狭にかかわらず対応する現代共通語形に注意する必要がある。そこで、見出し語以外で広い分布領域を持つ言い方やⅡ類の現代共通語形についても同様に扱い、最終的にはこれらの言い方がなぜ見出し語として選択されなかったのかなども言及したい。

〔4〕本稿で扱う36項目の地域性・歴史性については、多少の違いはあるが、従来から様々な語誌（語史）研究で触れられてきた。

本来ならば、それらを踏まえ、一つひとつ慎重に議論を進めるべきである。しかし、前稿同様《出来るだけ多くの見出し語を同一基準で扱い、その地域性の大凡の性格を把握する》という方針に従い、先行研究の参照や検討は必要最小限のものに止めた。

ただ、最低限『日本語地図・解説』（以下、『解説』と略記）以外に、徳川宗賢編『日本の方言地図』・『方言の読本』及び佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 9～11』には目を通した。直接引用する場合を除き、これらは一々書名を示すことをしない。

41・東西分布類（AB類）

〔1〕東西分布類と称しても東北から九州・沖縄まで同一の言い方が分布しているものは少ない。

AB類としての認定は、東日本の分布領域と西日本の分布領域が、項目ごとに広狭の違いはあるが、広さの点でほぼ等しいことを重視した。従って、この東日本と西日本の分布領域のバランスがAB類所属の24語に共通する特徴である。

〔11〕全国的な分布領域の点でAB類の見出し語が各項目の諸変種の中で最も広い領域を持つことは少なくない。

しかし、見出し語の他に有力な変種が存し、領域の上で拮抗している場合や見出し語が全国に点在し、無分布類（N類）に近い場合も存する。

全国的な分布傾向は概ね京阪・東京での分布と関係する。即ち、京阪にも東京にも分布するab型の15語は全国的にも広い地域に分布することが多く、京阪・東京ともに分布しないn型の4語は全国的な分布が限られている。

なお、AB類の見出し語24語のうち現代共通語形と一致するI類は20語、一致しないII類は4語で、AB類内のアンバランスが大きい。またII類はab型・a型が各1語、n型が2語で、AB類全体ではab型が約六割を占めるといふ傾向から逸脱している。

〔12〕AB類の見出し語の歴史性は、特徴①〈和名抄などの用例〉の多さ、特徴②〈用例の非存在〉・特徴③〈語林集成の用例〉の少なさの点で際立っていた。

ただ、京阪・東京の分布類型の違いによって微妙に特徴の見え方が異なるなど、見出し語ごとに地域性と歴史性の関連を検討していく必要性を残していた。

〔2〕AB類・ab型は15語で、AB類の過半数を占め、分布状況のあり方は多様であるため、(ア)～(ウ)の三グループに分ける。

(ア)は見出し語が全国的に圧倒的な分布領域をもつ場合（8語）、(イ)は見出し語が近畿・中部・関東という日本の中央部に連続した分布領域を持つが、周辺地域に広がる変種も有力で、それが近畿・関東に及ぶこと

もある場合（4語）、(ウ)は中部地方に別の変種が広がり、見出し語が中部に連続した分布領域をもたない場合（3語）である。

(イ)(ウ)には、見出し語以外に有力な変種が存し、見出し語が必ずしも最大の分布領域を有さない場合、AB類と判断したが、A類やB類に近い場合が存するなど、分布状況は複雑である。

なお、ab型唯一のII類の見出し語（項目27「じうやく」）は(ウ)に所属する。

〔21〕ab型・(ア)の8語も音声的変種の扱い方が問題となるが、見出し語しか分布していない訳ではない。分布領域は限られるが、他の変種の分布状況から更に(71)～(73)の三種に分けられる。

(71)は項目7「むま」・21「こめ」の見出し語で、他の変種が皆無か殆ど存せず、該当の見出し語がほぼ全国に分布する場合である。(72)は項目1「にし」・3「ちしん」・8「うし」・17「とんぼう」・33「すりばち」の見出し語で、東北や九州・琉球などの周辺地域に他の変種が分布するだけで、他の地域には見出し語が連続する場合である。(73)は項目28「すみれ」の見出し語で、もう一つの変種と全国的に混在する場合である。

(71)の見出し語〈ウマ〉〈コメ〉は、中古期の古辞書から見られる歴史の深いもので、分布の点でも圧倒的な広さを持つ。『物類称呼』の記述も他の言い方として前者で「まあ」「まあめ」、後者で「ぼさつ」という特殊な言い方を示し、後に「め」「ぼさつ」について説明を施すなど、一般的な記述（用例①など）と趣を異にする。近世後期においても分布状況は同様で、京坂・江戸でも幅広い場面（文体）で使われていたと考

えられる。この点でこれら2語は付言の余地がない。そこで、AB類・ab型の(7)グループでは(72)・(73)の6語について述べることにする。

〔21〕(72)の5語に共通する点は、東北及び九州・琉球の両方か、いずれかに別の変種が分布するだけで、それ以外の地域には見出し語が広く連続して分布していることである。

周辺地域の変種は殆ど周圈的に見出し語より古い言い方で、多くの場合、文献でもこれらの歴史的な古さは確認できる。

即ち、見出し語以外の変種とは、項目1「にじ」でスジ・ノジ類「東北・琉球／「のじ」(東国の小児)」、項目3「ちしん」でナエ類「東北・九州・琉球／「なる」(西国^{ワヤ}及中国西国)」、項目17「とんばう」でアケズ類「東北・九州・琉球／「あけづ」(奥州仙台南部)」・エンバ類「九州／「えんば」(西国)である。その他、項目8「うし」でベコ類「東北」・ベブ類「九州」、項目33「すりばち」でカナバチ類「新潟」・イセバチ類「東北／「いせばち」(上総及出羽)」・スリコバチ類「近畿南部／「すりこばち」(大坂)」・カガツ類「中四国／「かづつ」(山陽道及四国)」なども同様に考えられる。

これらの変種に対して見出し語はほぼ関東・中部・近畿・中四国に広がる。周圈的に新しい言い方とは言え、項目1・3・8の見出し語は中古期の古辞書から、項目17・33の見出し語も室町期の古辞書から見られる。近世後期には京坂・江戸ともにくつろいだ場面だけでなく改まった場面・書き言葉でも使われていたと考えられる^{註21}。

〔21〕(73)は項目28「すみれ」の見出し語だけで、(スミレ)と(スモートル) (グサ・バナ) がほぼ全国的に混在して分布する。

ただ、正確には、見出し語は中古期の古辞書から見られることを物語り、ほぼ全国に分布するが、スモートル類は室町期の古辞書からで、東北に少なく、中部・関東以西でも分布の薄い地域が目立つ。このため、分布領域は見出し語の方が広い。

なお、『物類称呼』には「畿内及近江加賀能登又東海道筋すべて・すまふとりぐさと云 江戸にて・すみれと云」(96頁)とある。また『浜萩(仙台)の「かきひきはな」の項では江戸言葉として「すみれ」が対照され、注に「すまふとり草^草京」と見え(304頁)、『浪花聞書』では「すまふとりぐさ^{語類}」(28～29頁)と記されている。

これらによると、近世後期京坂は(スモートルグサ)、江戸は(スミレ)という地域差があったことが分かる。しかし、LAではab型とした如く京阪・東京とも(スミレ)が一般的で、周辺地域も関東地方の方で(スモートルバナ)が盛んである。京阪周辺の(スミレ)は近世後期以降新たに広がったものであろうか。

〔22〕AB類・ab型の(71)と(72)の違いと同様(72)と(イ)の違いも程度差の問題である。

本稿で定めた(72)との相違点、即ち、(イ)の4語の特徴は、他の変種の勢力が強く、それが近畿・関東に及んで、京阪・東京という小地域においても見出し語と併用されることのある点である。しかし、全国的な分布状況は、見出し語の分布領域が最も広く、その広さに並ぶ変種は認められない。

〔22〕項目2「つら、」
見出し語(ツララ)の占有的な分布領域は、愛知・岐阜南部、滋賀を

除く近畿、鳥取・岡山、四国全域で、一応日本の中央部に広がる。関東は房総半島、茨城の太平洋岸に見られる程度である。

関東では〈アメンボー〉が有力で、東京23区内では〈ツララ〉と併用される。ただ、『物類称呼』には見出し語も〈アメンボー〉も使用地域が示されていない。『和英語林集成(初版・二版・三版)』では〈ツララ〉だけで〈アメンボー〉は見られない(『日本国語大辞典(二版)』『江戸語の辞典』にも〈アメンボー〉の文献の用例は見られない)。

東北の〈タルヒ〉〈スガ〉、北陸の〈カネコリ〉〈タルキ〉、中国の〈シンザエ〉〈スマル〉、九州の〈モーガンコ〉など、いろいろな変種が全国各地にまよる。しかし、全国的にみると、見出し語〈ツララ〉の分布領域が最も広い。

歴史的には、〈ツララ〉も『和玉篇』から用例が見られるが、東北の〈タルヒ〉は『日本国語大辞典(二版)』で「枕草子」などの用例が示される。『物類称呼』でも「仙台」の言い方として示される一方「氷柱 つら、たるひ」の如く副見出し語として示され、他の方言形と一線が画してある。また『和英語林集成(初版・二版・三版)』に〈タルヒ〉は見られるが、初版では「†」印 (word used only in books or obsolete.) が付されている。

「232」項目10「ふくろふ」
見出し語〈フクロー〉が東北中部から中国中部まで広く分布するが、関東・東海・近畿南部に〈ボロスケ〉〈ミミズク〉〈ゴロツチヨ〉〈ゴロスケ〉〈フルツク〉などの変種が分布する。

これらの中では近畿南部・四国・広島・山口に連続する〈フルツク〉

が目立つ。しかし、中古期の古辞書類から見られる見出し語の分布領域は圧倒的である。

なお、『物類称呼』に示してある言い方は「ねこ鳥」(常陸)・「よごう」(上総)・「鳥追」(伊勢白子)の3語だけである。LAには「鳥追」を除き、各々10数地点・4地点見られるだけである。

「223」項目11「せきれい」
見出し語〈セキレイ〉のまよる地域は、宮城・福島・関東・甲信越・東海・近畿東部である。

即ち、AB類としたが、分布の中心は三重・滋賀以東で、東日本分布類(B類)に近いところがある。このためか、『物類称呼』では「東国にて・せきれいと云」(42頁)の如く東日本の言い方とされる。

勿論、見出し語は中四国・九州にも見られる。しかし、中国では〈カワラスズメ〉、九州では〈イシタタキ〉が有力で、京阪でも見出し語は〈オビコ(ドリ)〉〈カワセミ〉と混在する。

『物類称呼』には京坂及びその周辺地域の記述がなく、オビコ類・カワセミ類も『日本国語大辞典(二版)』には文献の用例が示されていない。このため、近世後期の京坂の状態は伺い知ることが出来ない。ただ、当時から併用されていても見出し語は『色葉字類抄』から見られるなど、歴史の浅い言い方でない。このため、改まった場面で使われるなど、その文体価値は高いものであったと考えられる。

なお、分布から山形周辺と九州全域に分布する〈イシタタキ〉の方が古いと言われるが、文献の上では「鶴鶴 せきれい（如野にはくまのり 日本紀私記世一とつぎおへり）」の如く見出し形式の注記に見られる二つの言い方がより古い。これ

らが見出し語として選択されなかったのは、〈タルヒ〉同様京坂・江戸の話し言葉で一般的でなかったためであろう。

〔224〕項目18「かまきり」

東北で〈イボムシ〉などイボゝ類と混在するが、見出し語〈カマキリ〉はほぼ本州全域と瀬戸内海に面した四国・九州に分布する。

ただ、これらの地域でも各地固有の変種が存し、特に東京・埼玉・群馬南部では種々の変種と見出し語が混在する。例えば、東京では他に〈カマツチヨ〉〈カガミツチヨ〉〈トーロー〉〈ムシ〉〈ハラタチ〉〈ゴンベ〉などが見られる（DKAで23区内はほぼ〈カマキリ〉、都下は〈トカゲ〉で地域差が顕著である）。『物類称呼』でも「江戸にて・かまぎつてう 江戸田舎にて・はいとりむし」（71頁）と記されるが、見出し語の使用地域は記されていない。ただ、『和英語林集成（初版・二版・三版）』には見出し語〈カマキリ〉は見られるが、〈カマツチヨ〉以下の言い方は見出せない。

歴史的には東北を中心としながら、西日本では隠岐・見島・口之永良部島に見られるイボゝ類が最古の言い方で、文献でも〈イボジリ〉は中古期から認められる。『物類称呼』でも「螻螂 かまきり 一名いほじり」の如く副見出し語として掲げられる。ただ、見出し語は『和玉篇』から見られるなど、歴史は浅くない。

〔23〕AB類・ab型・(ウ)の3語は、中部地方に別の変種が広がり、それによって見出し語の分布が分断されている。

その領域を除くと、AB類・ab型・(イ)とほぼ同様の広がりが見られる。しかし、分布領域は必ずしも最大でない。

なお、項目24「たうがらし」・27「じうやく」は、AB類・ab型では珍しく古辞書類にあまり用例が見られない。

〔231〕項目24「たうがらし」

見出し語〈トীগーラシ〉は、近畿から中国に広がり、一部四国・九州に及ぶと同時に関東・東北南部にも見られる。

分布が連続していないが、これは、長野中央・新潟西端に〈コシヨ〉が分布し、また岐阜北部・静岡・山梨・長野の一部・新潟に〈ナンバン〉、福井・石川・富山・愛知東半には〈ナンバ〉など、ナンバン類が分布して東北に続いているためである。

これは、ある時期新しい言い方である〈トীগーラシ〉が京坂からナンバン類の盛んな江戸へ飛火し、江戸から関東全域へと広がったためと考えられる。ただ、関東で定着していることを物語り、『和英語林集成（初版・二版・三版）』は〈トীগーラシ〉だけで、〈ナンバン〉は見られない（『日本国語大辞典（二版）』に示された文献は、〈ナンバン〉は見られないが、〈コシヨ〉は「多聞院日記」（一五九三）と『物類称呼』だけ、『江戸語の辞典』にはいずれも見られない）。

但し、領域の広さは、西日本を中心とするトীগーラシ類と東日本を基盤とするナンバン類が拮抗する。

〔232〕項目27「じうやく」

ab型で唯一のII類である。それを物語るように地域性に特徴が多い。見出し語〈ジューヤク〉は前項〈トীগーラシ〉と同じく上方の新しい言い方として江戸に飛火したものである。ただ、より新しい言い方であったため、その分布領域は、西日本で近畿（兵庫・京都北部を除く）・四

国・中国の一部（島根・広島など）及び大分、東日本も東京都とその周辺地域程度である。

このため、AB類としたが、A類に近い、西日本に偏った分布を示す。但し、東京都でも23区内は〈ドクダミ〉と併用されるが、それ以外、都下は〈ジュウヤク〉専用である。

全国的な分布領域は、右の如き見出し語の分布状況のため、対応する現代共通語形〈ドクダミ〉（AB類・b型）の方が遙かに広い。即ち、ほぼ東日本全域に広がり、西日本も兵庫・鳥取・岡山・九州中部など、〈ジュウヤク〉の周辺地域に広がる。文献では確認できないが、〈ジュウヤク〉より古い言い方であることが分かる。

近世後期の江戸では〈ドクダミ〉が一般的なようで、『物類称呼』に「江戸にて・どくだみといふ」（91頁）・『常陸方言』に「ヂゴクソバ 江戸ニテハドクダミト云フ」（47頁）と見える。更に『和英語林集成（初版・二版・三版）』でも〈ドクダミ〉だけで、〈ジュウヤク〉は見られない。

見出し語〈ジュウヤク〉は『日本国語大辞典（二版）』でも「日葡辞書」以降からしか用例が拾えず、近世の用例は「書言字考節用集」（一七一一）・俳諧「鳳朗発句集」（一八四九）だけである（『江戸語の辞典』には〈ジュウヤク〉は見られず、〈ドクダミ〉は『物類称呼』を示すだけ）。『物類称呼』当時江戸に京坂出自の理解語として入ってきたばかりなのか、特定の場面で使われる程度まで定着していたのか、判断しかねる。

なお、「葦葉 じゅうやくしぶき」の如く副見出し語に〈シブキ〉が掲げ

られる。これは『和名抄』など、中古期の資料に限られる言い方である。『物類称呼』に使用地域は示されず、LAJの凡例・『日本方言大辞典』等にも見られない。近世後期でもすでに話し言葉では使われなくなっていたようである。

〔233〕項目32「まないた」

見出し語〈マナイタ〉は青森・岩手・秋田・山梨・岐阜などを除くとほぼ全国に分布するが、他の変種との併用地域も少なくない。

専用地域と言えるのは、山形・福島西半・関東西半・新潟・富山・長野・近畿（滋賀・兵庫北部を除く）・島根東部・四国全域・福岡（両筑）・大分南半程度である。他の地域は、東北部と茨城・千葉のサイバン類を除くと、〈キリバン〉の専用地域か、この言い方との併用地域である。

即ち、近畿と関東での見出し語の分布が山梨・静岡・愛知・岐阜・福井・滋賀などの〈キリバン〉によって分断されている。このため、全国的な分布領域は〈マナイタ〉と〈キリバン〉が拮抗している。

このような分布について、〈マナイタ〉と〈キリバン〉の先後関係も含め、『解説4』では十分な説明がなされていない。実際東日本での分布を見ると、〈トーガラシ〉〈ジュウヤク〉の如き飛火は考えられない。

ただ、〈マナイタ〉は中古期の古辞書から殆どすべての調査資料に用例が得られるが、〈キリバン〉は室町期以降で、用例もあまり拾えない。また『物類称呼』では〈マナイタ〉は見出し語として掲げられるだけで使用地域は示されず、〈キリバン〉は「駿河及上総」の言い方とされるだけで、扱ひ方に違いが見られる。ただ、『和英語林集成』では初版は

〈マナイタ〉のみ、二版・三版は〈マナイタ〉〈キリバン〉ともに見られる(『江戸語の辞典』は〈マナイタ〉のみ)。京坂では両語形が併用されていたと考えられるが、それは場面(文体)の違いでなく、『解説4』(22頁)が解くように魚用・野菜用という用途の違いによって使い分けられていたのであろう。

〔3〕AB類・a型は項目16「とかけ」の見出し語だけで、AB類でも数少ない現代共通語形と一致しないII類の一つである。

本項目の見出し語(トカケ)は、AB類としたが、京阪分布型(a型)だけあって、新潟・群馬に分布するものの、富山・岐阜・愛知から山口東部まで西日本に連続して広がる。このため、A類に近いところがあるが、全国的には最大の分布領域を有する。

東京は、福島を中心とするかのように勢力を南北に広げる現代共通語形(トカケ)(B類・b型)の南端にあたり、都下・山梨・神奈川・伊豆に広がる(カガミツチョ)と併用される。

なお、(トカケ)の大きなまとまりは右の如く東北南部・関東北部であるが、全国的には青森から鹿児島まで他の変種と混在しながら、また小さくまとまりながら分布する。

『物類称呼』では「畿内にて・とかけ：：江戸にては・とかげと、けの字を濁りてよぶ」(66頁)の如く、京坂と江戸の違いが捉えられている。また東京で(トカケ)と併用される(カガミツチョ)の類似形と言える「かまぎつてう」が「東国」の言い方として示されている(同形式が項目18「かまきり」では「江戸」の言い方とされる)。

右の如き[A]の分布や『物類称呼』の記述は、古辞書類の用例の現れ方

でもある程度確認できる。即ち、見出し語・現代共通語形とも中古期から確認でき、その分布領域の広さが裏付けられる。しかし、『和英語林集成』には初版・二版・三版とも見出し語は見られず、(トカケ)だけである。

京坂で深い歴史を有する(トカケ)であるが、現段階では江戸で一定の勢力を有していた形跡は確認できていない。このため、(トカケ)が江戸で使われていたとしても場面(文体)的にはかなり限られていたと考えられる。或いは、『和名抄』に「守宮非類名」(19・17ウ)と見られることも見出し語として選択された一因かもしれない。

〔4〕AB類・b型は、項目12「かたつぶり」・14「へび」・15「まむし」・20「ひきがへる」の見出し語4語で、すべて現代共通語形と一致するI類である。

いずれも東京分布型(b型)だけに別の変種が近畿を中心に広がり、見出し語が東京を含む東西の周辺地域に見られる。古辞書類では(カタツブリ)〈ヒキガエル〉が中古期から見られ、〈へび〉〈mamushi〉は室町期からである。ただ、〈へみ〉という変種は中古期から見られる。

〔41〕項目12「かたつぶり」

見出し語(カタツムリ)は全国的に広がるが、まとまった領域は秋田南半・山形・新潟北部・長野南半・山梨・石川・福井・飛騨地方・山口・高知・愛媛西半・大分などである。

紀伊半島南端を除く近畿地方はほぼ全域に〈デンデンムシ〉が広がる。また、関東地方は、北部でデーロ類やカタツムリ類、南部でマイマイ類がまとまっている。このため、東京分布型(b型)としたように東京に

〈カタツムリ〉も見られるが、〈マイマイツブロ〉〈マイマイツブリ〉の方が一般的である。

『物類称呼』には見出し語の使用地域は示されず、「五畿内にて・でんくむし」：江戸にて・まいくつぶり」（65頁）の如く現代の分布と一致する記述が見られる。また『浜荻（仙台）「へびのたまくら 和名抄蝸牛 加太音不利 まいくつむり」（260頁）』『御国通辞』「まいくつぶり 蝸牛 へびたまぐり」（8頁）及び『浪花聞書』「でんく虫 蛸也」（19頁）の如く各地の方言書には『物類称呼』の「五畿内」「江戸」の言い方が見られる。

また『和英語林集成（初版・二版・三版）』和英の部に見出し語は見られるが、英和の部「SNAIL」の項では三つの版いずれも〈マイマイツブラ〉〈タニシ〉〈デテムシ〉の3語だけである。

周知の如く〈カタツムリ〉はマイマイ類の一昔前の言い方、デテムシ類は最も新しい言い方である。『物類称呼』や方言書類に見出し語が「方言」として記されていないことも京坂・江戸における文体価値の高さを物語っている。

〔42〕項目14「へび」

本項目と次項目「まむし」の見出し語は、ともに近畿中央を含む西日本（近畿・中四国）に別の変種が分布し、東京を含むその周辺地域に見出し語が広がっている。

即ち、見出し語〈へび〉は東北・関東・中部及び四国東南部・九州東半から九州南部に分布して全国的に圧倒的な領域を有するが、〈クチナワ〉やその変種が近畿中央から中国・四国・九州西北部にまとまる。

『物類称呼』でも「関西及四国に・くちなは 関東に・へび」（65頁）

と現代同様の東西の対立が示されている。しかし、文献で〈クチナワ〉はすでに中古期から見られ、〈へび〉も〈ハミ〉の形でそれより僅かに古い程度である。このようにともに歴史のある言い方であるためか、『和英語林集成（初版・二版・三版）』では両語形が同じように示される。〈クチナワ〉は「関西及四国」の言い方とされるが、『江戸語の辞典』にも用例が見られるなど、江戸でもある程度使われていたと考えられる。

〔43〕項目15「まむし」

見出し語〈マムシ〉はほぼ全国に分布する。青森・鹿児島に孤立した領域が見られるが、山形・福島西半・西関東・中部全域・近畿東北部・山陰に連続した広い領域が続く。

京阪は〈ハメ〉で、四国全域にも見られ、同類の〈ハビ〉が近畿南部、〈ハミ〉が鳥取・島根東半を除く中国に広がり、一つのまとまりをなしている。

分布の上からは〈マムシ〉の方が古いように見えるが、古辞書類では見出し語は『易林本節用集』など、室町期のものから、〈ハミ〉は『和名抄』など、中古期のものから見られる（このためか、『物類称呼』では〈地域—方言形〉の記述の後に「是 和名 はみ也」（66頁）と記す）。この分布状況と文献での歴史の関連については『解説5』でも触れられていない。

『物類称呼』では〈マムシ〉の使用地域は記されず、〈ハメ〉は現在〈ヒラクチ〉の広がる「筑前」の言い方とされるなど、京坂・江戸の実態は分からない。しかし、『浪花聞書』に「はめ 反マムシ 鼻也」（3頁）と見え、

『東京方言語彙』では「まむし はめ」(379頁)の如く、〈マムシ〉と〈ハメ〉が対比してある。くつろいだ場面ではLAJの如く京坂と江戸で違いがあったようであるが、「反鼻也」の表記が示すように改まった場面などでは地域を問わず両語形が使われていたかもしれない。ちなみに『和英語林集成』で初版は〈マムシ〉だけで、二版・三版は〈マムシ〉〈ハミ〉が見られる(英和の部「VIPER」の項では三種とも両語形を示す)。

〔44〕項目20「ひきがへる」

見出し語〈ヒキガエル〉のまとまる地域は、福島・新潟・長野北部・山梨・静岡海岸部・北陸・近畿北半・山陰などで、日本海側に連続した分布が見られる。

関東にも分布するが、〈オカマガエル〉〈ガマガエル〉と混在する。中部には長野南部から静岡・愛知・岐阜東部にかけて〈ヒキダ〉、岐阜北部に〈カサ〉〈ドーサイ〉が勢力を有し、見出し語の分布を分断している。

関東で諸変種が混在することを反映して、東京では見出し語の他に〈フクガエル〉〈ガマガエル〉〈オカマ(ガエル)〉が見られる(DKAでは23区内は〈エボ(ガエル)〉〈オ(ー)ヒキ(ガエル)〉などで、〈ヒキガエル〉は見られない。これは見出しが「がまがえる」であり、LAJと調査の質問形式が異なるためかもしれない)。ただ、『物類称呼』で関東に関する記述は「房総」の「あんがう^又をかまがへる^又ふくあんごう」・「武ノ八王子」の「山あなかう」・「上野」の「大^をひき^又小なるを・べつとう」の他、「江戸」の「墓」^{ひまがへる}(以上、72〜73頁)だけである。特にLAJ

で関東から東北南部で勢力を持つ〈ガマガエル〉は「房総」の言い方とされるだけである。見出し語の中古期からは及ばないが、『日葡辞書』に「Gama」の形で見えるなど、室町期から見られる言い方で歴史は浅くない。ただ、『和英語林集成』では初版・二版は〈ガマ〉〈ヒキ〉、二版・三版は〈ヒキガエル〉〈ガマ〉〈ヒキ〉が見出しに示されるなど、今日の実態には近い姿が見える。

一方、近畿北半には見出し語が広がるが、京都では〈フクガエル〉、大阪ではそれ以外に〈ヒガエル〉〈オンビキ〉も見られる。『物類称呼』では「五畿内及参遠又は越路などにて・ふくがへるといへる」(72頁)の如く〈フクガエル〉が京坂あたりの言い方として取り上げられている。この〈フクガエル〉は全国的に〈ヒキガエル〉と混在するが、概ね新潟・長野・静岡以西に限られる。

本項目は方言量の多いものとして有名であるが、その分まとまった領域をもつ変種は少ない。このため、『色葉字類抄』から見られるなど、その歴史の深さもあり、〈ヒキガエル〉とその変種が最大の領域を有する。

見出し語に当時共通語的性格が存することは、各地の方言形が江戸語と対比・対照してあると言われる方言書(『筑紫方言』153頁・『浜荻(仙台)』451頁・『庄内(浜荻)』111頁・『御国通辞』8頁)で見出し語が方言形に対して示され、仙台方言について京坂のことばで説明してある方言書(『仙台言葉以呂波寄』「ますびつき ひきかへるの事」(41頁))に見出し語が見られることなどからも確認できる。京坂の〈フクガエル〉、江戸の〈ガマ(ガエル)〉に対し、改まった場面・書き言葉で使われて

いたと考えられる。

〔5〕AB類ながら京阪・東京ともに見られないn型は、項目13「なめくじり」・25「つくくし」・30「まつかさ」・36「こめびつ」の見出し語4語である。

これらは、〈マツカサ〉〈コメビツ〉のようにある程度連続してほぼ全国に分布する言い方と〈ナメクジリ〉〈ツクツクシ〉(ツクツクシ)のよう^註に全国各地に点在し、まとまった領域を持たない言い方に二分される。また前者は現代共通語形と一致するI類、後者は現代共通語形と一致しないII類である。

〔51〕〈マツカサ〉〈コメビツ〉は全国各地に分布するとは言え、調査した古辞書類ではあまり用例が得られない。

即ち、前者は『日葡辞書』『和英語林集成(初版・三版)』、後者は『和英語林集成(初版・三版)』だけで、〈コメビツ〉はAB類で唯一特徴③〈語林集成の用例〉を有していた。

しかし、『日本国語大辞典(二版)』で〈マツカサ〉は「延喜廿一年京極御息所褒子歌合」(九二二)から、〈コメビツ〉は俳諧「天満千句」(一六七六)・「好色一代男」(一六八二)などの用例が示される。

〔51〕項目30「まつかさ」

見出し語〈マツカサ〉は、全国に広がっていたところ、京阪・東京を中心に勢力を拡大した変種に分断されたような分布を示す。

即ち、〈マツカサ〉は秋田・山形・宮城・福島西半、茨城海岸部・千葉・神奈川・中部全域・三重・京都北部・岡山海岸部・島根・山口・四国・九州などに見られ、最も広い分布領域を有する。

『物類称呼』の見出し語(上) — 地域性と歴史性 — (山県浩)

東京では〈マツボクリ〉〈マツボンクリ〉〈マツノブンクリ〉が混在する。その周辺では、埼玉・群馬に〈マツコゴリ〉〈マツブクリ〉、栃木に〈マツダンゴ〉などが見られる。また京都南部・奈良・大阪・和歌山には〈チクロ・チチリ〉〈チンチラ〉などが存する。このように見出し語は関東・近畿地方では一般的でない。

『物類称呼』の記述は「畿内近辺にて・ち、りといふ」(108頁)だけであるが、これによっても右の京阪の分布が新しいものでないことが分かる。また『浪花聞書』で「ち、り松かき電ち」(6頁)・『東京京阪言語違』で「松ぼつくり ちんちり」(389頁)の如く見られる。近世後期には京坂・江戸のくつろいだ場面で〈チチリ〉〈マツボクリ〉などが使われていたと判断される。しかし、その中古期からの歴史に加え、『和英語林集成』初版・二版は〈マツカサ〉のみ、三版は〈マツカサ〉〈マツボクリ〉という状況や『浪花聞書』の説明の文言での使用を考えると、改まった場面や書き言葉では〈マツカサ〉が一般的であったと考えられる。

ちなみに、『解説5』では〈マツカサ〉と〈マツブクリ〉の関係に関して「マツカサが文章語であるのに対して、マツブクリは…古くからの口語的地位にあった…このような文語と口語との関係…」(144頁)と述べられる。

〔512〕項目36「こめびつ」

見出し語〈コメビツ〉は、多少他の変種と混在することもあるが、東南部・関東・中部・中四国・九州とほぼ全国にわたって広く分布する。ただ、近畿地方は、京都・滋賀に〈カラト〉、大阪・奈良北部・和歌

山に〈ゲブツ〉がまとまり、例外となる。〈コメビツ〉後の新しい言い方であろうが、『日本国語大辞典(二版)』の用例は、前者は俳諧「本朝文選」(二七〇六)から、後者は『物類称呼』のみである。

東京は「無回答」がまとまっている。これは『解説4』(22頁)の如く当地域の被調査者に米作農民が得られなかったためである。周辺地域には〈コメビツ〉が広がるため、むしろ本項目はAB類・b型とすべきであった。

なお、『物類称呼』には「東国にて・こめびつ 京にて・からとと云大坂及堺にて・げぶつ」(123頁)とあり、現代と同様三つの語形の対立が認められる。

なお、『和英語林集成(初版・三版)』は〈コメビツ〉のみであるが、三版には「ナ」印(obsolete=廃語)を付して〈カラト〉が掲げられている。京坂と江戸で使われる場面(文体)の幅は異なるが、〈コメビツ〉はそれぞれの地で常に上位場面で使われていたと考えられる。

〔52〕〈ナメクジリ〉〈ツクツクシ〉(ツクツクシ)は、〈マツカサ〉〈コメビツ〉とは対照的に古辞書類に用例が多く、特に後者〈ツクツクシ〉(ツクツクシ)は中古期のものから『和英語林集成』まで見られる。

このような古辞書類での現れ方を見せるが、LAでは全国的にまとまった分布を持たない。先の〈マツカサ〉以上に場面(文体)的に偏っていたと推測される。

〔52〕項目13「なめくじり」

見出し語〈ナメクジリ〉は、青森・秋田北部・石川・福井・岐阜北部・島根・広島北部などにまとまり、九州も対馬・五島・鹿児島西部・奄

美大島に点在する。

全国的には現代共通語形〈ナメクジ〉(AB類・b型)が東北から九州まで広がるが、関東・近畿では〈ナメクジラ〉が勢力を有し、領域的に両者が拮抗する。東京では〈ナメクジ〉であるが、京阪では〈ナメクジ〉〈ナメクジラ〉が見られ、後者の方が一般的である。

『物類称呼』には見出し語の他、〈ナメクジ〉〈ナメクジラ〉いずれも使用地域の記載がない。しかし、『浜荻(庄内)』では「なめくじらなめくじら」(111頁)の如く「江戸」の言い方として〈ナメクジ〉が示される。また『和英語林集成(初版・二版・三版)』は〈ナメクジ〉だけで、〈ナメクジリ〉〈ナメクジラ〉は見られない(英和の部「SLUG」の項でも三種とも〈ナメクジ〉のみ)。しかし、『江戸語の辞典』には「なめくじり」の項が立てられ、19世紀初期の人情本・滑稽本の用例が示される。ただ、諺「蛞蝓なめくじりと蛙かわずを一つに寄せる」などの例を見ると、文体(場面)的な高さが感じられる。

近世後期江戸のくつろいだ場面で〈ナメクジ〉が使われていたことは間違いない。京坂でもその近畿全域に及ぶ分布から〈ナメクジラ〉がくつろいだ場面では一般的であったと考えられる。上位場面になると、江戸では〈ナメクジ〉〈ナメクジリ〉いずれも使われていたように思われる。『江戸語の辞典』の用例もあるが、古辞書類で見出し語は『和玉篇』『伊京集』などから、〈ナメクジ〉は『名義抄』など、中古期のものから見られる。このように見出し語〈ナメクジリ〉は文献上最も古い言い方でない。

この程度の時代的な違いは相互に上位場面での使用を排除しあうもの

ではなからう。ただ、より古い言い方であり、『和名抄』に示されている(ナメクジ)が存するにもかかわらず、なぜ(ナメクジリ)が見出し語として選択されたかは不明である。或いは、(ナメクジ)は(ナメクジリ)の省略形、『方言の読本』(230頁)の如き「なめてくじる」虫などの語源意識でもあったのであろうか。或いは、『物類称呼』の(地域方言形)の記述の後に「貝原翁曰 なめくじり夏月屋上にはひのほりて螻蛄けらにへ変ずる有:」(65頁・出典は未確認)とあるが、この形式をそのまま引き写したのであろうか。

〔522〕項目25「つくくし」

見出し語(ツクツクシ(ツクツクシ))は、東北(宮城北部・山形内陸部・会津)・北陸(石川・福井)に若干まとまるなど東日本に目立つが、京都・大阪・兵庫・大分・熊本・長崎など西日本にも散在する。N類とすべきかとも思われるが、東西にわたって分布するため、AB類とした。

『色葉字類抄』からの歴史のある言い方だけにLAJの調査場面に掛からない文体価値を有していると考えられる。

全国的には、現代共通語形である(ツクシ)(AB類・a型)が東北・関東・九州などに展開し、分布領域は広い。また、(ツクシンボー)が関東南部・山梨・静岡東半、(ツクツクボーシ)が近畿、(ホーシ(コ))が兵庫・中国東半・四国北部など、領域は狭いがまとまっている。

『日本国語大辞典(二版)』の用例をみると、見出し語は10世紀末の文献、東京の言い方である(ツクシンボー)は20世紀初の近代小説、京阪の言い方である(ツクツクボーシ)は15世紀末の文献から示されて

いる。

『物類称呼』の記述は「東国にて・つくしともいふ語なり作州にて・ほうしといふ」(83頁)だけで、見出し語の使用地域は記されていない。ただ、本項目の場合、その文体価値の高さに加え、見出し語は「略語」である(ツクシ)の「本来の言い方」であることに意味があるのではなからうか。

なお、『和英語林集成(三版)』には(ツクシ)以外に(ツクツクシ)(ツクツクシ)は見られるが、今日東京周辺にまとまる(ツクシンボー)は示されていない。前掲の『日本国語大辞典(二版)』の用例も勘案すると、近世後期江戸ではまだ使われておらず、「東国」の言い方である(ツクシ)、また京坂では(ツクツクボーシ)が一般的で、改まった場面或いは書き言葉でいずれの地域でも(ツクツクシ(ツクツクシ))が使われていたと考えられる。

〔6〕日本の東西に広く分布し、歴史的にも古い古辞書類から用例の見られることの多いAB類の見出し語24語につき、その分布類型の見直しを行い、近世後期の実態や共通性などを述べておく。

〔61〕AB類として同じ分布類型にまとめたが、24語の分布状況は一つずつ異なり、他の類型と連続するところがある。

西日本分布類(A類)に近いものは、項目16「とかけ」・27「じうやく」の見出し語、東日本分布類(B類)に近いものは、項目11「せきれい」の見出し語、無分布類(N類)に近いものは、項目25「つくくし」の見出し語である。

その他、項目24「たうがらし」の見出し語もやや西日本分布類的など

ころがある。これは、先の項目27「じうやく」の見出し語と同じく京坂から江戸へ飛火した言い方であるためである。ただ、関東地方での広がり方が異なるため、項目24の方がAB類として安定している。しかし、いずれも京坂から連続的に東日本に広がったものでないため、程度の違いだけで、ともに東日本と西日本の分布領域はややアンバランスである。

また項目15「まむし」の見出し語はやや東日本分布類的なところがある。このため、鹿児島島の孤立した分布の解釈が問題として残るが、「マムシは東国の言葉であった」（佐藤編一九八三 11巻・220頁）との考えも存する。

〔62〕AB類の見出し語は、全国的にみて最大の分布領域を持つことが少なくない。

しかし、例外となる項目も認められる。例えば、A類に近い項目27「じうやく」では見出し語より〈ドクダミ〉の方が広い領域を持つ。項目24「たうがらし」でも見出し語と〈ナンバン〉が領域の広さで拮抗している。項目25「つくくし」は見出し語がまとまった分布領域を持たないため、〈ツクシ〉が全国的に最大の領域を持つ。その他、項目13「なめくじり」では、見出し語の領域は限られ、〈ナメクジ〉と〈ナメクジラ〉が領域の広さで拮抗する。

基本的に見出し語が圧倒的な分布領域を持つのは、ab型・(71)(72)の7項目の見出し語である。これら以外の項目では、見出し語が最大の分布領域を持ちはするが、別の変種も一定の広さを持つ（特に項目12「かたつぶり」〈デンデムシ〉・14「へび」〈クチナワ〉・28「すみれ」〈スモートリグサ〉・32「まないた」〈キリバン〉など）。

このような分布領域の広狭はある程度歴史を反映したもので、一定の領域を持つ言い方は京坂でしかるべき歴史が存する。

〔63〕東西日本の分布類型ほどでないが、京阪・東京の分布類型も実態を正確に反映していないところがあった。

例えば、前稿では京阪・東京に見出し語が単独で見られる場合も他の変種と併用されている場合も同様に扱った。しかし、併用形の存在は、近世後期からの変化を考える場合、無視できない。

〔63〕他の変種との併用は東京で多く、京阪は、項目11「せきれい」だけで、〈オビコ（ドリ）〉〈カワセミ〉と併用されていた。

東京では次の6項目で、見出し語と併用される変種は多彩である。

2 「つ、ら」 〓 〈アメンボー〉

12 「かたつぶり」 〓 〈マイマイツプロ〉 〈マイマイツブリ〉

※DKA 15～17では〈デンデムシ〉も一定の勢力を有する。

16 「とかげ」 〓 〈カガミツチョ〉

※DKA 24～26でもトカゲ類より〈カガミツチョ〉の方が優勢。

18 「かまきり」 〓 〈カマツチョ〉 〈カガミツチョ〉 〈トローロー（ムシ）〉

〈ハラタチ〉 〈ゴンベ〉

※DKA 22では〈カマキリ〉以外は勢力が弱く〈ハラタチ〉 〈ゴンベ〉

〈トカケ〉が1地点ずつ見られる程度である。

20 「ひきがへる」 〓 〈フクガエル〉 〈ガマガエル〉 〈オカマ（ガエル）〉

※DKA 16では〈エボ（ガエル）〉 〈オ（ー）ヒキ（ガエル）〉が一般的。

27 「じうやく」 〓 〈ドクダミ〉

基本的に見出し語は京坂を出自とする古い言い方で、併用形はそれよ

り新しい言い方となる。しかし、項目27「じうやく」は例外で、〈ドクダミ〉が古くからの言い方である。

後述の如く、これらの併用形は、近世後期に京坂・江戸で見られるものと文献で確認できない近世後期以降に生まれたものに分かれる。ただ、LAJの状況から当時江戸に存したと予測できるにもかかわらず、『物類称呼』も含め、文献に用例の見出しがたい場合もある。くつろいだ場面の言い方が文献で掬いきれない一面と言える。

〔632〕LAJにおける京阪・東京の併用状況も含め、今日の実態と『物類称呼』の記述などから推測できる当時の京坂・江戸の実態を比べると、次の項目で該当の言い方の衰退が認められる。

27 「じうやく」 〓 「どくだみ」(江戸)

28 「すみれ」 〓 「すまふとりくさ」(畿内及近江加賀能登又東海道筋)

33 「すりばち」 〓 「すりこばち」(大坂)

いずれも見出し語(ジューヤク)〈スミレ〉(スリバチ)が京坂・江戸で勢力を得てきた結果である。しかし、前述の如く完全に衰退した訳ではなく、江戸で併用されたり、周辺地域に残存したりしている。

ただ、見出し語との先後関係に問題が残るため、項目28・33には複雑な歴史を想定せざるを得ないところがある。

〔64〕AB類の見出し語は、基本的に京坂を出自とする言い方で、京坂・近畿地方から東西に広がっていったと考えられる。

AB類で唯一特徴③〈語林集成の用例〉を有した項目36「こめびつ」の見出し語も『日本国語大辞典(二版)』では17世紀の京坂の資料に用例が見られた。

京坂での歴史は、特徴①〈和名抄などの用例〉が半数を占めるように全体に深いものである。『日本国語大辞典(二版)』の用例を併せても近世の文献からしか見られないものは項目24「たうがらし」・36「こめびつ」の見出し語だけである(前者は16世紀末に渡来した植物であるため、当然の結果)。

以上の如き歴史の深さから、見出し語は京坂・江戸ともくつろいだ場面だけでなく、改まった場面などでも使われる文体価値の高さが予想される。

〔65〕見出し語24語の地域性・歴史性における共通性は、前項の出自の問題と絡むが、〈近世後期において一昔前の京坂語であること〉とまとめられる。

即ち、具体的には、①あまりに古い、伝統的な言い方(京坂・江戸で古語化・死語化したような言い方)を避ける一方、②近世後期の京坂・江戸のくつろいだ場面で使われる言い方も避けることである。

勿論、例外も存する。また項目7「むま」・21「こめ」の如く見出し語以外に他の変種が皆無か殆ど存さない場合、このような相対的な位置付けはできない。更に、①のみ、②のみの場合も同様であるが、右の如く捉えることで最少の例外で共通性が説明できる。

〔651〕『物類称呼』に示されている言い方で、見出し語より歴史的に古いものは、次の如くである。

1 「にじ」 〓 「のじ」(東国の小児)

2 「つら」 〓 「たるひ」(副見出し語・仙白)

3 「ぢしん」 〓 「なる」(西国及中国西国)

11 「せきれい」＝「にはくなぶり」（和名）・「とつぎおしへどり」（日本紀私記）・「いたたき」（西国及四国又は奥州）

17 「とんぼう」＝「あけづ」（奥州仙台南部）・「ゑんぼ」（西国）

18 「かまきり」＝イボ類「いほじり」（副見出し語）・「いほしり・いぼくひ」（相模）・「いほ虫」（奥州）・「いぼさし」（津軽）

27 「じうやく」＝「しぶき」（副見出し語）

その他、『物類称呼』に示されていないが、項目12「かたつぶり」のナメクジ類・ツブロ類も見出し語より古い言い方として知られている。

また、項目13「なめくじり」の（ナメクジ）、項目15「まむし」の（ハミ）は、見出し語より古く、『和名抄』などから見られる言い方である。

しかし、先の7項目の言い方などと異なり、京坂や江戸のくつろいだ場面が使われていた。

もし、『物類称呼』で見出し語が由緒ある言い方であることだけを基準にして選択されているのであれば、文献でその存在は容易に知られるため、「のじ」以下の言い方が見出し語に選択されていたはずである。

しかし、これらの言い方が避けられていることから、『和名抄』に用例が見られるなど、歴史の深さに加え、京坂・上方を含む地域で話し言葉として使われていることが見出し語に共通した側面として見えてくる。

〔652〕『物類称呼』など、近世後期の文献や現代方言における京阪・東京や近畿・関東地方での分布から見出し語より歴史的に新しい言い方で、当時京坂や江戸のくつろいだ場面が使われていた可能性のあるものは、次の10項目の言い方である。

2 「つら、」＝（アメンボー）（東京・LAJ）

11 「せきれい」＝（オビコ（ドリ））（カワセミ）（京阪・LAJ）

12 「かたつぶり」＝「*でんくむし」（畿内）・「*まいくつぶり」（江戸）

14 「へび」＝「*くちなは」（関西及西国）

18 「かまきり」＝「*かまぎつてう」（江戸）

20 「ひきがへる」＝「*ふくがへる」（五畿内及参遠又は越路）

（フクガエル）（ガマガエル）（オカマ（ガエル））（東京・LAJ）

25 「つくくし」＝「*つくし」（東国）／（ツクツクボーシ）（京阪・LAJ）

28 「すみれ」＝「*すまふとりぐさ」（畿内及近江加賀能登又東海道筋）

30 「まつかさ」＝「*ちり」（畿内近辺）／（マツボックリ）（マツボングリ）（マツノブングリ）（東京・LAJ）

36 「こめびつ」＝「*からと」（京）・「*げぶつ」（大坂及堺）

※『物類称呼』に見られる言い方を基準に示した。その言い方（又は類似形）がLAJで該当地域に見られる場合は「*」印を付した。

ただ、LAJに見られるものすべてが当時京坂・江戸に存した訳ではない。（アメンボー）（オビコ（ドリ））（カワセミ）などは近世後期以降に生

まれた可能性が高い。しかし、右の如き言い方が避けられていることから、歴史の深さがここでも関わってくるが、話し言葉でくつろいだ場面だけでなく、改まった場面で見出し語に共通した側面があると見てくる。

〔653〕新しい言い方が避けられる点には、例外が少なくない。

例えば、京坂のより新しい言い方が見出し語として選択されている場合に項目27「じうやく」の見出し語がある。

LAJでの分布状況から〈ジュウヤク〉の新しさは確かであるが、論中述べた如く江戸の文献にその確例は得られていない。「物類称呼」でも〈ドクダミ〉が「江戸」とされるなど、まだ〈ジュウヤク〉は江戸に根を下ろしていなかったのかもしれない。それなら尚更AB類の見出し語としての例外性は強くなる。

また項目16「とかけ」の見出し語は、LAJで京阪を中心に分布する上、「物類称呼」で「畿内」の言い方とされる。後述の如くA類では珍しくないが、このように「物類称呼」で京坂・近畿地方の言い方と記されたもので、見出し語に選択された言い方はAB類24語の中で〈トカゲ〉だけである。

ただ、どうしてこれらがこのようにAB類で例外となるか、現時点では説明できない。見出し語〈ジュウヤク〉〈トカゲ〉側で共通語的性格における優位性を探ろうとしても見出しがたく、対する言い方（いずれも現代共通語形）〈ドクダミ〉〈トカゲ〉側でこれらが選択されなかった理由も現時点では見出せていない。

ただ、〈トカゲ〉は〈ドクダミ〉に比べると、今日の分布領域は狭く、江戸での勢力も弱いと考えられるなど、両者を同じように扱うことは出来ない。

なお、「物類称呼」との関連が指摘される『大和本草』では「葎菜^{ドクダミ}ドクダミト云 又十葉トモ云」(I・363頁)と記され、見出し語〈ジュウヤク〉は〈ドクダミ〉に対して従属的・二次的な存在とされている。に

もかわらず〈ジュウヤク〉を見出し語とした点には吾山独自の判断が存するように思われる。

「654」当時の江戸の言い方で、見出し語として避けられているものは、項目12「まいくつぶり」・16「とかけ」・18「かまぎつてう」・27「どくだみ」の4語で、すべて『物類称呼』で「江戸」の言い方とされる。

同じく江戸でも使われていた可能性のある「東国」と記された言い方で、見出し語とされていないものは、項目1「のじ」(一の小鬼)・16「かなへび・かまぎつてう」・25「つくし」・33「しらぢ」(一の女言)の5語である。

これらすべてが見出し語より新しい言い方ではないが、当時江戸のくつろいだ場面で使われていたと考えられるものが見出し語として選択されていない点は注目に値する。

勿論、例外は存し、見出し語になっているもので、「江戸」の言い方は、項目28「すみれ」・33「すりばち」、「関東」「東国」の言い方は、項目3「おしん」・14「へび」(以上、関東)及び項目11「せきれい」・36「こめびつ」(以上、東国)である。

しかし、これらの言い方はいずれも京坂で一定の歴史を持ち、先の見出し語として選択されなかった「江戸」「東国」の言い方に比べると、文体価値も高そうである。

「655」見出し語以外に①の古い伝統的な言い方、②の新しい言い方が見られる場合、これら三語形には文体価値の違いが予想され、次の如き場面(文体)による使い分けが考えられる。

◇書き言葉で使われるものⅡ見出し語より古い伝統的な言い方（話し言葉では死語化・廃語化）

◇話し言葉・改まった場面で使われるものⅡ一昔前の言い方（多く見出し語）

◇話し言葉・くつろいだ場面で使われるものⅡ見出し語より新しい言い方

勿論、見出し語がくつろいだ場面でも改まった場面でも書き言葉でも使われる場合もあろう。

〔66〕以上の如くAB類の見出し語24語に共通する側面として一定の歴史を背景とする一昔前の京坂語が浮かび上がってきた。

そして、それ故に一定の文体価値の高さが想定できる。しかし、その文体価値は個々の見出し語について特に江戸の文献を調査した結果に基づくものではない。このため、本稿の限りでは、京坂のくつろいだ場面の言い方として例外となる（トカケ）（ジューヤク）が江戸でどのように使われていたかについては不明のままである。また（ナメクジリ）についても歴史性・地域性の点で類似する（ナメクジ）との関係が確認できていない。^注

◇別表の説明

別表Ⅰ・Ⅱ

『物類称呼』の見出し語36語及び一部の現代共通語形について、主として中古期から近世期までの上方の古辞書類における用例の現れ方をま

とめたもの。

※別表Ⅱで扱った現代共通語形14語は、現代共通語形と一致しない見出し語（別表Ⅰで*印を付したもの）に対応するものである。

※「現代共通語形」は、前稿（山県二〇〇三）と同じく『日本方言大辞典・別巻』（小学館）で「標準語」と称せられている見出し形式に従った。

※見出し語の「類」「型」の内容は、次の如くである（詳細は、前稿5章を参照のこと）。

○「類」Ⅱ東西日本の分布類型

AB類Ⅱ東西分布型Ⅰ東日本・西日本を問わず全国的に広く分布する

A類Ⅱ西日本分布型Ⅰ西日本に特徴的に分布する

B類Ⅱ東日本分布型Ⅰ東日本に特徴的に分布する

N類Ⅱ無分布型Ⅰ東日本・西日本を問わず全国的に殆ど分布しない

○「型」Ⅱ京阪・東京の分布類型

ab型Ⅱ京阪・東京分布型Ⅰ京都市・大阪市及び東京23区内に分布する

a型Ⅱ京阪分布型Ⅰ京都市・大阪市に分布する

b型Ⅱ東京分布型Ⅰ東京23区内に分布する

n型Ⅱ無分布型Ⅰ京都市・大阪市及び東京23区内いずれにも分布しない

※調査資料

表には資料の略称を示した。正式名称等は、次の如くである。

「和名抄」Ⅱ「二十卷本和名類聚抄」（正宗一九七七）

- 〔名義抄〕 〓 〔観智院本類聚名義抄〕（正宗一九五五）
 〔色葉抄〕 〓 〔黒川本色葉字類抄〕（中田・峰岸一九六四）
 〔和玉篇〕 〓 〔倭玉篇慶長十五年版〕（中田・北一九八一）
 〔文明本〕 〓 〔文明本節用集〕（中田・峰岸一九七九）
 〔伊京集〕 〓 〔伊京集〕（中田一九七九）
 〔明応本〕 〓 〔明応五年本節用集〕（中田一九七九）
 〔饅頭本〕 〓 〔饅頭屋本節用集〕（中田一九七九）
 〔黒本本〕 〓 〔黒本本節用集〕（中田一九七九）
 〔易林本〕 〓 〔易林本節用集〕（中田一九七九）
 〔弘治本〕 〓 〔弘治二年本節用集〕（中田一九七四）
 〔永禄本〕 〓 〔永禄二年本節用集〕（中田一九七四）
 〔堯空本〕 〓 〔堯空本節用集〕（中田一九七四）
 〔両足本〕 〓 〔両足院本節用集〕（中田一九七四）
 〔恵空本〕 〓 〔恵空本節用集大全〕（中田一九七五）
 〔日葡〕 〓 〔日葡辞書〕（土井・森田・長南一九八〇）
 〔和英・初〕 〓 〔和英語林集成・初版〕（松村・飛田一九六六）
 〔和英・三〕 〓 〔和英語林集成・第三版〕（松村一九八〇）
- 資料の並べ方は、なるべく成立順になるよう心掛けたが、節用集の類は使用した影印・索引本でまとめる。このため、時代的に前後するところがある。
- 用例は見出し語及びその振り仮名の言い方を採用し、注記や用例の言い方は採用しない。

※調査結果

- 対象語形が調査資料に見られる場合は「用例アリ」として「○」、見られない場合は「用例ナシ」として「×」を該当するセルに記す。
- 訛語などの類似語形の見られる場合、誤記などと考えられる場合は、「△」を記し、「備考」にその語形を示す。ただ、該当の言い方が見られない点に変わりなく、用例処理に当たっては「用例ナシ（×）」として扱った。
- 『永禄二年本節用集』の影印には落丁があるため（241頁～256頁）、索引に対象語形が記されていても確認できないことがある。この場合は、該当するセルに「-」を記す。

注

- (1) ある言い方が『物類称呼』で見出し語として選択されていることに關して、基本的に以下の如く考える。
- 見出し語として存在することは、その言い方が当時の江戸で社会的にどのような性格を有するかにかかわらず、最終的には吾山が見出し語としてふさわしいと判断した結果による（勿論、吾山の判断以降に生じる様々なミスによって、ふさわしいと判断した言い方が実際に記されない場合もある）。
- 勿論、本稿ではその（見出し語としてのふさわしさ）の中で大きな比重を占める性格が「共通語的性格」、即ち、土屋一九八七の「江戸

共通語」の三条件、①話し言葉、②(位相的・地域的な)通用性の高さ、③場面性の高さ(具体的には「公的な場面における現象」69頁)であると考ええる。「物類称呼」を江戸共通語の資料として利用しているとする以上、前提として見出し語は当時の江戸において右の如き共通語的性格を有する言い方、即ち、そのような社会的な実態を反映した言い方であると考ええる訳である。

ただ、見出し語としてふさわしいと判断し、選択するのは吾山である。吾山の考える(見出し語としてのふさわしさ)と共通語的性格がすべての語において完全に重なるとは限らない。

例えば、吾山がふさわしさの中心的な要因として共通語的性格(ここではその内容がどのようなものであったかまで問題にしない)を認識し、そのような性格を有する言い方を見出し語にしようと意図しても、吾山の捉え方が現実のことばのあり方と常に一致するとは限らない。また日常的な事物ならともかく、「物類称呼」に多い「動物」や「生植」の類の場合、共通語的性格を有する言い方を吾山個人の判断で正確に捉えることは難しいかもしれない。事物によっては共通語的性格を有する言い方が当時存在していない場合もあるう。

更に吾山に共通語的性格を有する言い方を選択しようという意識の存しない場合も考えておかねばならない。即ち、ある言い方の持つ社会的な実態とは無関係に吾山の恣意によって見出し語として選択される場合がないとは言えない。同様の事例として、本草書類など、先行の諸文献の(地域―方言形)の記述を引き写ししている例が知られている。当然見出し語においてもあり得よう(勿論、その本草書の見

出し語が社会的な実態を反映していれば、問題は小さかろうが、問題は皆無ではない)。

(2) 注(1)で述べたが、吾山が見出し語としてふさわしいと判断する要因として共通語的性格を考えた場合、土屋氏の「江戸共通語」の条件の中では、①の話し言葉を除くと、内省・観察のしやすさの点から、③場面性の高さ、次に②のうち位相的な通用性の高さが基準とされる可能性が高い。

本稿で問題とする地域性、特に分布領域の広さに基づく地域的な通用性の高さは、今日「共通語」を規定するとき一般的な特徴であるが、方言話者個々の意識レベルには普通存在しない。ましてや近世後期に手を尽くして全国の方言形を収集したとは言え、特定の言い方が全国的にどのように使われ、理解されるかなどは、吾山にとって埒外のことでなかっただろうか。

確かに見出し語を社会的存在として捉え、その性格を云々する場合、地域性の一面として分布領域の広狭は重要である。しかし、見出し語としての選択の問題となると、社会的な実態と同時に吾山個人の捉え方も考慮しておかなければならない。

(3) 『和英語林集成』の調査は、当初初版・第三版だけで、別表もその調査結果に基づいて作成した。しかし、本稿の執筆に当たって飛田・李二〇〇〇・一で再調査を行い、第二版も調査した。しかし、対象とした項目の範囲では、第二版は初版または第三版と同一で、第二版独自の傾向は見られなかった。そこで、別表は改めず、第二版の結果は論中に適宜示すことにした。

(4) 特徴①～③によって、古くから一般的であった言い方であるか否かが判定できる。更に、特徴②は歴史的に見て一般性に欠ける言い方か、特徴③は新しく一般的になった言い方を弁別する指標になる。また特徴③は地域性を探る手掛かりになる。

ただ、特徴②③に関して、用例の非存在の解釈は難しい。例えば、その言い方（形式）が当時存在しなかった、その項目（事物）が調査資料に記載されなかった、その項目自体が当時存在しなかった等々。

また特徴①～③の現れ方によって傾向を捉えるが、いずれの特徴も見られない見出し語が36語中13語存する。勿論、各種辞典や索引類によって時代時代の用例の存否はある程度確認している。しかし、本稿における「歴史性」とは限られた古辞書類での用例の現れ方に基づく大凡の傾向性である点、注意が必要である。

(5) 三特徴の見られない見出し語13語につき、『和名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』及び『和英語林集成（初版・三版）』を除く古辞書類13種における用例の現れ方をみると、1語平均5.4種の古辞書類に用例が見られることになる。

但し、13語のうち5語（主として「生植」の項目22・24・27・30・35の見出し語）は、『和英語林集成』を除くと『恵空本』か『日葡辞書』にしか用例が見られない。これらを除く残り8語では平均8.1種となる。

(6) これまでは特徴①に対するものとして特徴②③を一括して扱ってきた。特徴②③は調査資料に用例が多くない点で軌を一にする。しかし、その性格は異なる。Ⅱ類の見出し語に対応する現代共通語形に顕著な

特徴③は、特徴①に対して歴史性の浅さや地域性の違いを物語る。

(7) 三特徴の見られない現代共通語形3語について、注(5)に倣い、古辞書類13種（『和名類聚抄』『類聚妙義抄』『色葉字類抄』『和英語林集成（初版・三版）』を除く）における用例の現れ方をみると、1語平均4.0種の古辞書類となる。見出し語13語（5.4種）に比べてもやや少ない。但し、Ⅱ類の項目（事物）の一般的傾向として古辞書類に用例が現れにくいことも考慮しておかねばならない。

例えば、項目5「くろぶし」・22「なんばんきび」・23「りうきういも」・26「ぼうふら」・27「じうやく」・35「いかのほり」などは、別表の如く見出し語・現代共通語形とも古辞書類に殆ど用例が見られない。

(8) 項目33「すりばち」について、『物類称呼』に「江戸にて・すりばち 大坂にて・すりこばち」（115頁）と記され、LAJでも大阪南端・和歌山には（スリコバチ）が見られる。

このため、近世後期（スリバチ）の近畿地方における分布領域は他の(72)の見出し語のそれに比べると狭かったかもしれない。

古辞書類では（スリコバチ）の方が一般的で、『日本国語大辞典（二版）』では（スリバチ）は「運歩色葉」（一五四八）に対して、（スリコバチ）は「米沢本沙石集」（一一八三）などと、若干古くから見られる。『解説4』では触れられていないが、（スリコバチ）は（スリコギ）の一昔前の言い方とも考えられる。すると、近世後期から今日まで大阪・和歌山方面で徐々に後退していったことになる。

ただ、『燈心野語』では「かわらはち すりばちの事」（85頁）と見

える。京と大坂との地域差も考えておかねばならないが、本資料の性格を考慮すると（山県二〇〇一）、その記述から（スリバチ）がある程度の文体価値を有していたことが知られる。この場合、大坂ではくつろいだ場面で（スチコバチ）、改まった場面などで（スリコギ）という使い分けがなされていたと推測される。すると、この場合、先の文献による先後関係を考え直さなければならぬかもしれない。

- (9) この割注の形式は、『和名抄』^{「罵禽」} 名聞教久余集 日本紀 記曰此日本字之類也（18・9才）とほぼ同一である。見出し語（セキレイ）は『和名抄』に見えないが、項目作成に当たって吾山が本書を参照していたことは間違いない。見出し語に限らず『和名抄』の記述には注意が必要である。

- (10) 項目25の見出し語は『物類称呼』で「つくくし」と記されている。項目16「とかけ」などの如く（ツクツクシ）と（ツクツクシ）の清濁の違いは問題にされていない。その上、LAJ・24図の凡例でも「CUKU CUKUSI ~ CUKUZUKUSI」の如く第三音節の清濁は揺れとして処理してある。そこで、本稿でも具体的にその形式を問題にする場合はLAJに倣い、煩雑であるが、（ツクツクシ）と表記する。
- (11) AB類にはII類の見出し語が少なかったが、その4語のうち3語がこのように例外として問題になる。

ある言い方が見出し語として選択されている場合、その共通語的性格におけるある優位性を何らかの形で云々することになる。ただし、見出し語として選択された結果が存するだけに、ある一面を取り立ててすることで事足りるところがなくもない。一方、別の言い方（多く現代共通語形）が近世後期に共通語的性格で見出し語に対して劣っていた

ことを積極的に示すことは、本稿の調査結果の限りではかなり難しい。

◇参考文献・引用文献等

- 井上史雄（二〇〇一）『計量的方言区画』（明治書院）
- 大橋勝男（一九七六）『関東地方方言事象分布地図 3』（桜楓社）
- 河西秀早子（一九八一）『標準語形の全国的分布』『言語生活』— 354
- 国立国語研究所編（一九六六～七四）『日本言語地図 1～6』（大蔵省印刷局）
- 佐藤喜代治編（一九八三）『講座日本語の語彙 9～11 語誌①～③』（明治書院）
- 小学館辞典編集部編（一九九一）『方言の読本』（小学館）
- 尚学図書編（一九八九）『日本方言大辞典』（小学館）
- 杉本つとむ（一九八九）『方言に憑かれた男・越谷吾山』（さきたま出版会）
- 土屋信一（一九八七）『江戸共通語をめぐって』『香川大学国文研究』— 12
- 徳川宗賢編（一九七九）『中公新書・日本の方言地図』（中央公論社）
- 徳川宗賢（一九九三）『方言地理学の展開』（ひつじ書房）
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（二〇〇〇）
- 〓（二〇〇二）『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）
- 前田 勇（一九七九）『講談社学術文庫・江戸語の辞典』（講談社）
- 山県 浩（一九九五）『江戸共通語資料としての『物類称呼』——先行本草書との関連性——』（群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編）

（一九九六・九七）「江戸共通語資料としての『物類称呼』（上）

（下）——見出し語の歴史性を中心に——『群馬大学教育学部紀要

人文・社会科学編』—45・46

（一九九八）『物類称呼』の見出し語——江戸共通語史での位

置——『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』—47

（二〇〇一）「近世方言書類の上方語——『仙台言葉以呂波寄』

『燈心野語』を中心に——『筑紫語学論叢』（風間書房）

（二〇〇三）『物類称呼』の見出し語——地域性の全体的傾向——

『福岡大学日本語日本文学』—13

東條操校訂（一九四一）『岩波文庫・物類称呼』（岩波書店）

吉澤義則（一九三三）『校本物類称呼諸国方言索引』（立命館出版部）

土井・森田・長南編訳（一九八〇）『邦訳日葡辞書』（岩波書店）

中田祝夫（一九七四）『古辞書大系・印度本節用集古本四種研究並びに

総合索引 影印篇・索引篇』（勉誠社）

（一九七五）『古辞書大系・恵空編節用集大全研究並びに索引

影印篇・索引篇』（勉誠社）

（一九七九）『古辞書大系・改定新版古本節用集六種研究並び

に総合索引 影印篇・索引篇』（勉誠社）

中田祝夫・北恭昭編（一九八二）『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引

影印篇・索引篇』（勉誠社）

中田祝夫・峰岸明編（一九六四）『色葉字類抄研究並びに総合索引 黒

川本影印編・索引編』（風間書房）

——編（一九七九）『改定新版文明本節用集研究並びに索

引 影印篇・索引篇』（勉誠社）

飛田良文・李漢燮編（二〇〇〇・〇一）『和英語林集成 初版・二版・

三版対照総索引 一〜三』（港の人）

正宗敦夫編（一九五五）『類聚名義抄 第1・2巻』（風間書房）

——編（一九七七）『倭名類聚抄 第1・2巻』（風間書房）

松村明解説（一九八〇）『講談社学術文庫・和英語林集成（第三版）』

（講談社）

松村明・飛田良文解説（一九六六）『和英語林集成——復刻版——』（北辰）

菊池武人編（一九九五）『近世仙台方言書 翻刻編』（明治書院）

土屋信一（一九九一）『東京京阪言語違のことば』『近代語研究 10』

（武蔵野書院）

福井久蔵編（一九七五）『国語学大系 10 方言二』（国書刊行会）

正宗敦夫編（一九三一）『日本古典全集・第四期・片言付録 物類称呼

浪花聞書 丹波通辞』（日本古典全集刊行会）

◇調査文献等

※論中引用した近世の文献と出典は、次の如くである。

- 『大和本草』（二七〇九刊） 〓白井一九九二
『仙台言葉以呂波寄』（二七二〇序） 〓菊池一九九五
『燈心野語』（二七三六序） 〓菊池一九九五
『浜萩（庄内）』（二七七六以降） 〓三矢一九三〇
『御国通辞』（二七九〇） 〓福井一九七五
『浜萩（仙台）』（二八二三頃） 〓菊池一九九五
『浪花聞書』（二八一九頃） 〓正宗一九三一
『筑紫方言』（文化文政以降） 〓福井一九七五
『常陸方言』（未詳） 〓福井一九七五
『東京京阪言語違』（一八八六） 〓土屋一九九九

【最終稿二〇〇四年五月二一日】

別表—I

NO	見出し語	調査資料		和名抄	名義抄	色葉抄	和玉篇	文明本	伊京集	明応本	饅頭本	黒本本	易林本	弘治本	永禄本	堯空本	両足本	恵空本	日葡	和英初	和英三	備考
		類	型																			
1	にじ	AB	a b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2	つらゝ	AB	a b	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	
3	ぢしん	AB	a b	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
4	*まゆ	A	n	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	
5	*くろぶし	B	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
6	*きびす	A	a	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	
7	むま	AB	a b	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	ウマ
8	うし	AB	a b	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9	*うごもち	N	n	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	
10	ふくろふ	AB	a b	△	○	○	○	○	△	△	△	△	○	△	—	△	×	○	○	○	△	フクロ
11	せきれい	AB	a b	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	
12	かたつぶり	AB	b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	カタツリ
13	*なめくじり	AB	n	×	×	×	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	
14	へび	AB	b	△	△	△	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	へミ
15	まむし	AB	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	
16	*とかけ	AB	a	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	
17	とんぼう	AB	a b	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
18	かまきり	AB	a b	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
19	*かはづ	B	n	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	
20	ひきがへる	AB	b	×	×	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	×	○	△	×	○	ヒキガイル
21	こめ	AB	a b	×	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	○	○	
22	*なんばんきび	A	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	
23	*りうきういも	A	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
24	たうがらし	AB	a b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	
25	*つくへし	AB	n	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	
26	*ほうふら	A	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	ポーブラ
27	*じうやく	AB	a b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	
28	すみれ	AB	a b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	
29	*たけ	A	n	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	○	
30	まつかさ	AB	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	
31	かゝし	B	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	△	カガシ
32	まないた	AB	a b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	
33	すりばち	AB	a b	×	×	×	×	△	△	△	○	△	○	△	△	△	×	△	○	○	○	スリコヤ
34	すりこぎ	B	b	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	
35	*いかのぼり	A	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	
36	こめびつ	AB	n	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	

『物類称呼』の見出し語(上) — 地域性と歴史性 — (山県浩)

別表—Ⅱ

NO	共通語形	調査資料		和名抄	名義抄	色葉抄	和玉篇	文明本	伊京集	明応本	饅頭本	黒本本	易林本	弘治本	永禄本	堯空本	両足本	惠空本	日葡	和英初	和英三	備考	
		類	型																				
4	ま ゆ げ	AB	a b	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	
5	くるぶし	B	n	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	
6	か か と	B	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
9	も ぐ ら	AB	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
13	なめくじ	AB	b	○	○	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	
16	と か げ	B	b	×	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	
19	か え る	AB	a b	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	カイル
22	とうもろこし	B	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
23	さつまいも	AB	a b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
25	つ く し	AB	a	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	
26	かぼちゃ	AB	a	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
27	どくだみ	AB	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
29	き の こ	B	a b	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	
35	た こ	AB	b	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	